

君命受けて宗清は、身を片糸の夜の関、守れば敵も夜あらしも、矢猛心の矢屏風に、隔て厳しき板廂降たる雪か、野も山も皆白妙と、いつか頭に積る雪、寒さに負ぬ宗清が、六波羅よりの上意を受け、左馬頭が枝葉の子供、見つけ次第に首打てと、清盛公の厳しき掟、其制札に松を手折りて松を助くと、内府重盛殿の詞を給ふは、何様心あり氣な御掟
兎にも角にも関守は、話相手のないので退屈、睡魔を避くる此兵書、治世に乱を忘れぬため、彼の孫康が雪あかり、どりや友人を開いて見やうか
古郷を出しにまざる涙かな、夢に別るる枕とは、実に定家が詠歌も

身に呉竹の伏見なる、知辺の方を訪ねんと、紫竹を出てあとや先

歩み習はぬ道芝の、雪の剣に裳ぎへ、紅色さそふ照草の、今は果敢なき常盤の前、いたはしや今若とて若君を両袖に、包めど余るうき事の、世をうし若は懷中に、

凍る乳房を抱き寐の

顔を見るさへいと尚、歩みつかれておはしける

母様あぶなう御座ります、必ず怪我して下さるなや

ヲヲ今若よう言てたもつた、紫竹の里を出しより、たよりに思ふは其方ばかり、思へば昨日は昔にて、鏡が石に蔭たのみ、三人の子供はまうけても、御運拙き源の

此行末、必ず平家の武士に、見咎められぬやうにしたてもや、兎角いふうち伏見へも間はない、二人とも辛棒して歩いてたもや

言ど乙若頑是なく

もう歩くのはいやぢやいやぢや

アア是は又どうしたもの、今にねんねをさす程に、聞分けて歩くものぢや、それ見や向ふが雪明りで、鳥羽の縄手や小幡の里

聽て小幡の山越えて、馬はあれども徒歩徒跳、君を思へば行ぞとよ、あるくものには花紅葉、花の手車手を引きて

歩みかかれば雪風に、笠を取られしつく杖の、雪に涙も玉銚の、其道もせを行悩む

ヤア夜中といひ怪しい女、稚子を大勢連て此関を越す氣であらうが、此所は小幡の関

義朝が殘党詮議の為、宗清殿の厳しい堅め、サア有様に名乗つて通れ

サア妾はとも都の市人、伏見の辺へ知辺あつて、尋める内に此大雪、二人の子供に道はかゆかず、思はず日を暮したり、どうぞ情に此関を

ヤアそうぬかす程猶怪しい、サア女めと立上れば

ヤレ待て兩人、聞けば子供を連た女とな、源氏の余類に似合の註文、身がぢぢぢきに糺してくれう

何か思案の宗清が、氷る足駄に善惡の、邪正の道を踏分けて、関の扉の庭づたひ

賤しからざる上臈の供を連ず只一人、見れば稚い子供をつれ、ハテあでやかな

屹とながめて居たりしが

コリヤ女よく聞けよ、今四海漸く穏かなるも、先達て亡びたる、左馬頭義朝、大勢の子供あつて、所々方々に漂泊なし、殊に五条の雑仕常磐が腹には、三人の

男子あるよし、生置いては後日のため、見付次第に首うてと、新たに立し此関所、此宗清が眼力に、一目見たればのがれは無い、常盤なりと白状いたせ

様子問はれてふさがる胸

エエそんなら三人の子供がある故に、サア其疑義も子供故、子のある女は何国にも

アア言れな其言訳、子供供の事は扱置きて、言ずと知れた美蓉の目眦、国色の聞えある常磐御前、ほからあらう筈がない、身が引立てて福原殿へ

すりや私をどうあつても、ほんに思へば此身の濡衣、是非もなき世の有様ぢやなあ

コリヤ者共、大事の落人関所の庭へ

サア女め立う

是非なくぜひなくもあらしこに、引立てられて常磐御前

すき間もあらば遠近の、たつきも知らぬ関の庭、巣を離れたる黄鳥の

吹雪に迷ふ風情なり

もう斯なつては籠中の鳥、迷るとて逃しはせぬ、然し一人ならず三四人、思へば不憚な事でもある、ヲヲ幸さいはひ

うしろに立し高札の雪打ひ文字のあや

コレ是を見よ、此高札に松を手折りて松を助く

操にかけし詞づめ、返事を松の高札に、手折るとも助くるとも

此宗清へ仰せなれど

生ては置かぬ落人の

素性を明して助かるか、イヤサもし常盤なら手にかける、又松ならば助けるとも、思案極めて返答致せ

サア夫は

サアサアサア

成程妾こそ其常磐、とても叶はぬ此身の行末、サア潔よう手にかけて

ヲヲよい覚悟觀念なせ

抜放したる氷の刃、峰の吹雪に照りさそふ、光るは夜半の月代と、見紛ふうちにこは如何に、刃物はそれで谷影の、岩の間に雪散りたり

ややそりや自ら助んとて

松を助くる制札の、掟厳しき清盛殿、松の操を破れといふ、謎が解くれば其松の、雪も解けよと君の厳命

スリヤ其松に松の操を

色かへぬ松色かへる松

シテ三人の此子供は

小枝も口に

雪を払ふて

直様これより、サアサア参らう、イザ御供と宗清に、助けられたる稚子の、其源は谷の音、峰の笹と音信れて、南柯の夢と覺めにける